

令和 8 年度 栄東中学校入学試験問題

I 入試(1月10日) 〔国 語〕 (50 分)

受 験 番 号	
------------	--

氏 名	
-----	--

注 意 事 項

1. 試験開始の合図があるまで、問題用紙の表紙を上にして、静かに待ちましょう。
2. 監督^{かんとく}の先生の指示があったら、**問題用紙**と**解答用紙**のどちらにも**受験番号**と**氏名**を必ず記入してください。
3. 問題用紙は、表紙を除いて全部で 21 ページあります。ページ数を確認しましょう。
4. 答えは、すべて**解答用紙**に記入してください。
5. 印刷のはっきりしないところなど、質問があったら、だまって手をあげて監督の先生に聞きましょう。
6. 試験中、気分が悪くなった場合には、監督の先生に申し出てください。
7. 試験が終わったら、**問題用紙**と**解答用紙**は別々にして、監督の先生の指示にしたがって提出してください。
8. 字数指定のある問題は「、」や「。」などの記号も 1 字として数えるものとします。

一

次の（ 1 ）（ 6 ）に当てはまる最も適切な言葉をあとの語群から選び、それぞれ漢字に直して答えなさい。ただし、語群の言葉は一度ずつしか使いません。

- ・研究者が（ 1 ）を展開する。
- ・両者で（ 2 ）を取り交わす。
- ・役所で（ 3 ）であることを証明する。

-
- ・子どもの（ 4 ）を豊かにする。
 - ・茶道の洗練された（ 5 ）。
 - ・親友の（ 6 ）にしたがう。

【語群】

しよさ じろん ちゅうげん ねんしよ じょうそう にくしん

二

次の1～8の外来語の意味を表す熟語を、あとの語群の漢字を使い指定された字数で作ります。例にならって語群から最も適切な漢字を選び、記号で答えなさい。ただし語群の記号（漢字）は一度ずつしか使いません。

(例) センター (二字)

【語群】 (例)

X 央

Y 下

Z 中

答え ↓

Z X

1 バッシング (二字)

2 クオリティー (二字)

3 マイノリティ (三字)

4 マネージメント (二字)

5 ポピュラー (三字)

6 スタンス (二字)

7 ドキュメント (二字)

8 ユニーク (三字)

【語群】

A 大

B 自

C 衆

D 派

E 質

F 非

G 管

H 数

I 書

J 場

K 立

L 理

M 少

N 難

O 独

P 文

Q 的

R 品

S 性

三 次の文章を読んであとの問いに答えなさい。ただし、設問の都合上一部改変した個所があります。

私たちはまれに、言葉を介^かさずに他者と百パーセント分かり合えた（あるいは、少なくとも自分ではそう思っている）陶酔^{とうすい}的な瞬間^{しゅんかん}を経験する。そして、同様のうっとりするような瞬間をまた味わうことを夢見る。そして、その願望は、言葉に対する失望へと跳ね返ることになる。つまり、そもそも言葉というものは理想的なコミュニケーションにとって邪魔なものだ、という具合に一般化してしまうのだ。

コミュニケーションに限らず、私たちはときにそのような混乱した思考に囚^{とら}われる。A、たまにしか遭遇^{そうごう}できない理想的な

状況^{じょうきやう}を、いつもそうあるべき状況として位置づけてしまうということだ。B、例外的な状況を基準にして、その特殊^{とくしゆ}な状況に

おいては不要であったものを、どの状況においても不要なものだと一般化して捉^{とら}えてしまうのである。そもそも言葉なんていない、邪魔ものだ、というふうに。

C 必要なのは、こうした混乱した思考に絡^かめとられないことである。うっとり^よと酔ったような例外的状況は、日常の素面^{しらみ}の状況があつてはじめて可能なものだ。そして、その日常の多くの場面で、私たちは言葉を用いて行^{こう}為しているのである。

加えて、私たちは常に世界の物事を言葉に置き換^かえて語っているわけでもない。たとえば「外は雨が降っている」のように、何らかの物事を言い表す（報告する、記録する）ことは、言葉を用いた多種多様な行為のごく一部に過ぎない。言い換えれば、他の無数の行為において、言葉はいかなる物事も言い表していないケースが多いということだ。したがって、〈言葉は物事の不完全な模造品^{もぞうひん}でしかない〉という類^{たぐ}いの不信は、言葉の働きに対するごく狭^{せま}い見方から生じる偏見^{へんけん}に過ぎない。

D、それでも……という、納得^{なつとく}できない思いが残るかもしれない。「ウイスキー」がウイスキーではなく、「ケーキ」がケーキではないことは確かではないか。「このケーキは美味^{おい}しい」という言葉が、このケーキの美味しさを表現するには不十分であり、「このリングはすごく深い赤色をしている」という言葉が、このリングの微妙^{びみょう}な色合いを表現するには不十分であることは、やはり確かなのではないか。世界に存在する実に豊かな風味や色合いや感覚などを表現するには、言葉があまりに解像度が低く、粗雑^{そざつ}な代物であることは、否定しようがないではないか。

しかし、このような思いには、言葉の役割に対する見当違いな期待と失望がある。ここからは、言葉の役割とはどのようなものなのか、私たちは言葉をどう捉え、どう向き合うべきなのかについて、あらためて考えていくことにしよう。

世界に存在する物事を写し取る模造品——それゆえ、世界のなかには存在しない、影のような奇妙な何か——として言葉を捉えるならば、それに「不完全」とか「粗雑」といったレッテルが貼られるのは当たり前だ。というのも、現実のリングは「リング」という音でも「リング」という形のインクの染みでもないからだ。音やインクの染みが、リングそのものに成り代わられるわけがない。物事を「言葉で言い表す」とか「言葉にする（言語化する）」というのは、そもそも、そうした「本物の不完全な模造品を作成する」ということは別の営みなのではないだろうか。

ある親子が居間で食卓を囲んでいる様子を想像してみよう。食事が終わる頃に、親が「冷蔵庫にリングがあるよ」と言う。子は冷蔵庫を開けて、「おお、真っ赤だ」と言いながらひとつ取り出し、包丁でそのリングの皮を剥いて切り分け、食卓に出す。子は一個食べて、「酸っぱい」と言う。親も一個口に入れて、「確かに酸っぱいね。でも香りはすごくいい」と言う。

以上のすべての発話を、リングの模造品（コピー）を作成しようとしている、というふうに捉えるのは明らかにピントを外している。むしろ、親子はこの一連のやりとりにおいてそのつど、リングの特定の特徴ないし側面に注意を向け、それを相手と共有しようとしている。

まず、親が「冷蔵庫にリングがあるよ」と言ったときには、リングという果物の存在に漠然と注意を向けている。また、子が「おお、真っ赤だ」と言っているときには、リングの色という側面に焦点が当てられている。「酸っぱい」と言い合っているときには、リングの味という側面に、「香りはすごくいい」と言っているときには、リングの香りという側面に、それぞれ関心が向いている。

このように、しばしば私たちの発話は、物事に特定の角度から光を当て、そこに浮かび上がる特定の相貌（＝特徴、側面、表情）を際立たせる、いわばライティングとしての役割を果たしている。その意味では、言葉は、発話というライティングのための主要な資源である——ライトやライトスタンド、電源のような、専門的な設備ないし工具のようなものである——と言える。その他の主要な資源としては、身体の発声器官や手、脳、あるいは、音を伝える空気などがあるが、それらはもちろん、「世界のなかには存在しない影のような奇妙な何か」などではなく、世界の一部にほかならない。そして、言葉も同様に、音やインクの染みなどとして世界

のなかに存在するのであって、「世界のなかには存在しない影のような奇妙な何か」などではない。

繰り返すなら、言葉は、物事の特定の相貌（≡特徴、側面、表情）に注意や関心を向けるために必要な資源（設備、工具）である。たとえば「このリンゴの味」とか、「このリンゴは甘い」「酸っぱい」「美味しい」などという言葉があるからこそ、私たちはこれらの言葉を発したり聞いたりすることによって、リンゴの味という側面に——さらに、甘み、酸味、美味しさといった味の諸側面に——光を当て、その側面をめぐって相手とコミュニケーションをおこなうことができるのだ。

もちろん、リンゴを切り分け、それを無言で相手に渡して一緒に食することによっても、リンゴの味などについて相手とコミュニケーションをおこなうことは可能だ。しかし、お互いが実際にリンゴのどこに注意や関心を向けているかは不明瞭だ。相手はもしかしたら、味ではなく香りに、あるいは、歯応えや瑞々しさといったものに関心を向けているかもしれない。世界のなかの物事は、リングひとつとっても、実にさまざまな相貌を含みもっている。そして、コミュニケーションが成立するということの基本的な要件は、お互いの注意や関心が同じ相貌へと向かっていることにはかならない。リンゴの味（≡リンゴという物の、味というひとつの相貌）をめぐってコミュニケーションをおこなうことができていなければ、リンゴの味についてお互いの見解や評価が一致しないことすらできないのだ。

では、お互いの注意を物事のある特定の相貌に向けたり、その方向がお互いに一致していることを確かめたりするにはどうすればよいか。それは、言葉を使うことなしにはきわめて困難だろう。

私たちは言葉を発することによって、物事の特定の相貌に注意を向けたり、その注意を他者と共有したりしている。そしてその注意は、物事の存在やその属性、状態といったものに向けられるだけではない。たとえば、「おはよう」と挨拶を交わし合うことによって私たちは、お互いの親密さや信頼関係（の維持）といったものに関心を向け合っているとと言えるだろう。また、「ありがとう」という言葉を相手にかけることによって私たちは、相手が自分にくれたことに対して、肯定的な面から光を当てようとしていると言えるだろう。

また、発話を通して向けられる注意や関心は、焦点がくつきりと定まった輪郭の明確なものだとは限らない。先述のように、ある対象の存在に漠然と注意を向けることもあれば（「冷蔵庫にリンゴがあるよ」等々）、誰かの名前を思い出せないということに注意を

向けることもある（「あの芸能人の名前なんだっけ？」等々）。

それから、私たちは物事の言葉にできないような相貌に注意を向けることもある。たとえば、私が眼前に広がる壮大な夕焼けを見て、「この美しさはとても言葉にできない」と言うときには、赤色とも緋色ひいろとも朱色しゅいろともオレンジ色とも赤橙色あかだいだいいろともつかない微妙な色合いと、それに胸打たれている自分の心境に注意を向けている。そして、この色合いを誰かに見せてあげたいなどと思っている。同様に、誰かと一緒にケーキを食べて、「このケーキはなんとも言えない美味しさだ」と言つて二人で感動し合っているときには、「甘い」とか「フルーティ」とか「香り高い」といった言葉では片づけられないような絶妙な味わいそのものに関心が向いている。つまりこうした場合、「言葉にできない」とか「なんとも言えない」とか「えも言われぬ」といった発話は、物事の特定の相貌（色合い、味、香り、等々）の微妙さや絶妙さといったものにとりわけ重大な関心を寄せる行為となつてゐるのである。

確かに、「美しい」という言葉では夕焼けの美しさは語りえないし、「赤い」という言葉ではリングの微妙な色合いそのものを言い尽くせない。このケーキの美味しさはとても言葉にはできないし、この痛みはまさに X に尽くしがたい。しかしそれは、言葉の限界などではない。なぜなら、そもそも言葉の役割とは、物事の複製となることではないからだ。「美しい」という言葉も「赤い」という言葉も、それから、「語りえない」とか「X」に尽くしがたい」といった言葉も、物事の特定の相貌に、特定の仕方
6
で注意や関心を向ける際に必要とされる資源なのである。

さらに言えば、物事にはそもそも言葉なしには立ち現れない相貌というものも存在する。言い換えれば、言葉なしには得られない着眼点や発想といったものが存在する。もちろん、たとえば言葉をもたない動物も、夕焼けに染まった空を見て、さつきまでの空の色と違うことに驚くことがあるかもしれない。そして、その場合その動物は、夕焼けの色という相貌に関心を向けていと言えるかもしれない。しかし、たとえば〈せつない風景〉という夕焼けの相貌に関心を向けることはできないだろう。というのも、「せつない」という感覚を捉え、また、風景にせつなさを見て取るためには、この言葉が担につてゐる深い意味合い、すなわち、「寂しい」さび「悲しい」「心が苦しい」「胸が締めつけられるようだ」といった意味が重なり合う微妙なニュアンスを理解している必要があるからだ。

（古田徹也『言葉なんていらない？ 私と世界のあいだ』より）

問一 本文中の A } D に当てはまる最も適切な言葉を次から選び、記号で答えなさい。

ア つまり イ まず ウ そして エ たとえば オ しかし

問二 — 線部1「こうした混乱した思考に絡めとられないこと」とはどういうことですか。最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 他者とのコミュニケーションにおいて、言葉を必須^{ひつす}とせず、心がけ次第で言葉がなくとも他者と百パーセント分かり合える、理想的な交流を容易に行えると知ること。

イ 言葉を使わずに成立する、他者との理想的なやりとりを当たり前と考えず、言葉を用いた日常的なコミュニケーションを重視すべきだと理解すること。

ウ 言葉を使わず他者と心を通わせるような、理想のコミュニケーションは常にできるものではないため、それが成功した場合の喜びが大きくなると気づくこと。

エ 言葉に頼^{たよ}らない代わりに、心身の負担^{たふ}が大きい対話を理想的なものとせず、主に言葉を用いるコミュニケーションが、理想的だと考えるべきだということ。

オ 他者と意思の疎通^{そつう}をする方法を言葉だけに限ってしまわず、言葉が通じない相手とも、理想的なコミュニケーションをとる努力をすべきだということ。

問三 — 線部2「しかし、このような思いには、言葉の役割に対する見当違いな期待と失望がある」とありますが、「見当違いな期待」とはどういう「期待」ですか。解答用紙に合うように、二十字以内で答えなさい。

問四 — 線部3 「一連のやりとりにおいてそのつど、リンゴの特定の特徴ないし側面に注意を向け」る行為を、本文中ではどうたとえていますか。ここより後から六字で書き抜きなさい。

問五 — 線部4 「リンゴの味についてお互いの見解や評価が一致しないことすらできないのだ」とありますが、どういうことですか。最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 対象の同じ側面に注目させないと、話し相手を論破して自分の考えを押し通すことができないということ。
イ リンゴというものを論じる場合、味よりも香りや見た目に注目してしまうと、話が弾まないということ。
ウ 対象が何であれ、言葉を間にはさまない限り、他者とのコミュニケーションは成立しないということ。
エ リンゴは種類が多いため、予めどのリンゴを話題にするか明確にしないと話がかみ合わないということ。
オ 対象の同じ部分にお互いが注目していないと、自身の考えを相手と共有できなくなってしまうということ。

問六 — 線部5 「物事の言葉にできないような相貌」とはどういうものですか。最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 存在感が薄すぎて、言葉にしようとする前に人々の記憶から消えてしまい、表現できないもの。
イ 真の意味で理解することが難しいため、話者の知らない国の言葉でしか表現できないもの。
ウ 特定の言葉で区別できない複雑さを持つために、自分の知る言葉では対応できず表現できないもの。
エ 言葉が生まれる以前にこの世からなくなってしまったために、もはや表現できないもの。
オ 当てはまる言葉が存在しないため、身振り手振りなど、言葉以外の方法でしか表現できないもの。

問七 本文中二か所の X に共通して当てはまる言葉をひらがな四字で答えなさい。

問八 — 線部6「そもそも言葉なしには立ち現れない相貌」についての説明として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 人間とは異なる言葉を使う動物にしか感じ取ることのできない物事の美しさ。

イ 言葉の正確な意味を知らないと見つけることができない物事の問題点。

ウ どこかでそれを示す言葉に触れていないと理解ができない物事の感覚的な性質。

エ たとえ不正確でもそれらしい言葉を無理に当てはめて表現するしかない物事の側面。

オ 言葉を使わなければ世間の人々に広く知らしめることができない物事の特徴。

問九 本文を通じて、筆者は言葉の役割をどういうものととらえていますか。四十字以上六十字以内で答えなさい。

問十 次に示すのは、本文を読んだ生徒たちの会話です。本文の内容を踏まえたものとして適切ではないものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 筆者によると、言葉を介さないで百パーセント分かり合えるコミュニケーションはあくまでもまれな例であって、それが当たり前のものだと考えるのは間違いなんだよね。

イ そうだね。確かに世の中のあらゆる物事を言葉で言い表せるわけではないけれど、言いかえれば言葉は物事の一側面を確実に表しているんだから、言葉は「邪魔もの」なんかじゃないと僕も思うよ。

ウ 実際、言葉にしないと伝わらないことって多いよね。たとえばケンカした友達ちに謝るときだって、きちんと「ごめんなさい」って言葉にするからこそ、相手にもこっちの心が伝わるんだし。

エ 気を付けないといけないのは、筆者も言葉を使わない交流が不可能だとは言っていないことだね。リンゴの例では、同じ物に意識を向けてさえいれば味や香りについて感じたことを共有できるって書いてるし。

オ 結局のところ、私たちは言葉があるからこそ食べ物にしろ自然の風景にしろ、そのままだと気づくことのできない物事の側面にまで注目して、それを奥深く味わうことができるんだよね。

四 次の文章は高田郁『星の教室』の一場面です。潤間さやかは中学一年生のとき不登校になり、卒業証書も頑なに受け取らないまま二十歳になりました。ある日、義務教育を終えられなかった人たちが学ぶという夜間中学の存在を知り、勇気を出して河堀夜間中学に入学します。夜間中学には学齢期に教育の機会を奪われた幅広い年齢層の人たちがいて、その仲間と交流していくうちに、さやかの生活や考えも少しずつ変化してきました。次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

「あ、潤間さん」

江口先生が、さやかを呼ぶ。

「余ったプリント、悪いけど、一年四組の教室に持って行ってくれませんか？ 枚数、あっちで足りてへんかも知れないので」
はい、すぐに、とさやかは渡されたプリントを手に、教室を飛び出した。

一年生の教室は三階にある。

階段を軽快に駆け上がり、目指すクラスへと急ぐ。すでに授業が始まっているらしく、廊下の窓から覗けば、五十代のジャージ姿の女性教諭が、チョークで板書している。さやかには馴染のない教員だった。

邪魔にならないよう入室のタイミングを計ったが、黒板に書かれた文字を見て、「えっ？」と思った。そこには、角ばった癖のある字で、「助平」と書かれていた。

「プリント見て」

チョークを置いて椅子に座ると、教師は、手もとのプリントをひらひら振ってみせる。

「例文、音読しますで。『尻を触ったな。この助平め』」

軽い笑いが起きる。高齢の生徒が多いクラスで、皆、仕方なしに笑っている印象を受けた。

何で？ 何でなん？

何で、そんな字……。

さやかは混乱して、もしか見誤りではないか、と幾度も黒板を確かめる。やはり間違いはなかった。

助走、助手、介助、助言。平和、平均、水平、地平。「助」と「平」を教えたのなら、もっと相應しい熟語は一杯ある。

百歩譲つて、生徒に親しみを持つてもらうためだったとして……ないない、とさやかは強く頭を振った。

そんな、自分ひとりで面白がつてるだけやん。

生徒に教える教材、何でもつと真剣に作らへんの？ それでも、私たちの先生なん？

必ずしも、人格者が教職を選ぶわけではない。教師になるべきではなかった人間と、学齢期に関わってしまったさやかである。

けれど、少なくともこの学校で出会う先生たちは違った。生徒想いで、教えることに一生懸命で……。ことに、文字や言葉を教え

るクラスでは、各々に相應しい教材を用いて、生徒の理解力を高める努力を忘れない。そんな教師ばかりだと思っていた。

¹河堀夜間中学校に入学して、初めて覚える怒りだった。遠足の連絡プリントを渡すはずが、さやかはそのまま廊下を引き返す。

「潤間さん、どないしたん？」

保健室の前で、養護教諭の鈴木と A 合わせになった。

鈴木先生は、さやかの瞳を覗き、

「怖い顔してるよ。何かあった？」

と、優しく尋ねた。

鈴木先生なら、さやかの怒りをしつかり聞いてくれるだろう。けれど、さやかには、²どうしても言えなかった。

「先生、これ、一年四組の生徒さんに渡してもらえますか。私、もう授業が始まってしまふんで、行かないと」

返事も聞かずに、鈴木先生にプリントを押し付けると、さやかは床を蹴って走りだした。

「さやかちゃん、ほんまにどないしたんよ」

授業を終えての帰り道、^{*1}落子が自転車脇に停めて、さやかの腕を取った。

「補食に手えもつけん、鮭のお結びも食べてくれへん。全然、笑いもせえへんし、喋らへん——何ぞあったんと違うん？」^{*2}

さやかを軽く揺さぶって、落子は問うた。^{*3}スアンや遠見も心配そうに様子を窺っている。^{*4}

だが、さやかは固く結んだ唇を解こうとはしなかった。もしかすると、スアンが今後、ああした授業に遭遇するかも知れない。それを考えると、ことにスアンには聞かせたくなかった。

「喋りたくないものに、無理強いしたらあかんやろ。ただなあ……」

^{*5}けんじ 健児は思案顔になったあと、腕時計に目を落として、

「なあ、三十分だけ、ファミレスかどつかで、茶あせえへんか」と、提案した。

学校と駅の間、全国にチェーン展開しているファミリレストランがある。

午後九時を回り、夕飯目当ての客足も少し落ち着いた頃合いだった。

「静かな席がええんやけど」

健児に言われて、店員は周囲に客の居ない、端の広い席に一同を案内する。

「皆で寄り道すんの、初めてやな。落子さん、ここ、ビールもあるで」

はしゃぐ遠見に「今日はお茶にしとき」と、落子が B を刺した。

「スアン、家に電話しといた方がええんと違うか。旦那、心配するやろ」

携帯、持ってたやんな、と健児から尋ねられて、スアンはこつくりと頷いた。

携帯電話を手に、スアンは席を立つ。友の後ろ姿を目で追って、さやかは小さく息を吐いた。

テーブル越し、健児が「もしかして」と、さやかの方に身を乗りだした。

「サヤサヤ、もしかして一年四組で吉村の授業、見たんと違うか」

吉村とは、まさにジャージ姿の件の教師のことだ。健児の推理に、落子と遠見が揃って「ああ」と得心の声を上げる。むしろ、さやかの方が驚き、目を大きく見開いて、三人を見やった。

健児がにやにやと笑って、

「この二人も、吉村の酷い授業の C を受けたクチャ」

と、落子と遠見を示す。

「健児君、先生を呼び捨てにするんは、あんまり感心せんよ」

年下の同級生を窘めた上で、落子は、

「私は入学時期が違うけど、私の時も、遠見さんの時も『助平』やったわ。せやったねえ？」
と、傍らの遠見に確かめる。

せや、と遠見は大きくひとつ、頷いてみせた。

「『尻を触ったな。この助平め』いう例文を、得意そうに読み上げてはったわ」

「ええええつ」

店内に響き渡るほどの声が、さやかの口から飛び出した。

スアンが戻り、テーブルに珈琲が五人分、運ばれてきた。

「吉村先生のあれは、まあ、ネタみたいなもんや。毎年、同じプリントを遣い回ししてるよって、殆どの生徒に知られててなあ」
拍子抜けして呆然としているさやかに、遠見が何でもない体で伝える。それが止めの一撃となつて、さやかは頭を抱えてテーブルに突つ伏した。

「ネタ……助平がネタ……」

あれほど衝撃を受け、怒りが収まらなかったのに、今は身体中から力が抜けてしまった。

「そら、初めて見たら、ショックやろ。けどな、さやかちゃん、生徒も先生も、色んなひとが居てるよってにな」

生徒の中には、美術や音楽の授業を「時間の無駄」だと決めつけて、一切、受けない者もいる。教える側も教わる側も、本当にそれぞれだ。

遠見がそう言つて、さやかを慰めた。（中略）

「何も学校だけに限らへん。どこの世界にかて、ろくでなしは居てる。けどなあ、さやかちゃん、私ら生徒は、貪欲で強⁴かなんよ。やる気のない先生の授業であつても、自分を磨^{みが}く砂に変えてしまえる」

相手を変えることは無理でも、こちらの考え方を変えれば、やり過^{しやぐぜん}ごしていける——人生の大先輩^{せんぱい}の言葉だが、さやかは今一つ、釈然^{しやくぜん}としない。

「カレー、読メル。コーラ、読メル」

傍らで、遠見とスアンがメニューを覗き込んで話していた。

「バッチグーや、スアンちゃん。ほな、今度は、これな。これ、何て読む？」

「ドリア。読メルケド、ワカラナイ」

首を捻^{ひね}るスアンに、「せやな、わしも食べたことのない料理やけど」と応えて、遠見は脇^{わき}に置いた鞆^{かばん}を探^{さぐ}った。

「スアンちゃん、これ。こっちで勉強^{めいぐ}しよか」

テーブルの水気をおしぼりで拭^{ぬぐ}って、遠見は鞆^{かばん}から取り出したものを載^のせた。

「ああ、懐^{なつ}かしい！」

落子が両の手を合わせて、大喜びしている。

表と裏が画用紙の、薄^{うす}い冊子。随分^{ずいぶん}と読み込まれたものなのだろう。草臥^{くたび}れて、よれよれになっている。表紙には、太々と手書き

された「メニュー」の題字。

「さやかちゃん、見てみるか」

遠見は言つて、さやかに冊子を寄越^{よこ}した。

「ああ、これは……」

受け取つて開けば、「ステーキ」「ハヤシライス」「マロンパフェ」などの文字に添^そえて、それぞれのイラスト、それに値段までが記されている。本物のレストランのメニューと比べても遜色^{そんしよく}のない、手作りのメニューだった。

「昔、国語の先生が作ってくれたんや。コピーして製本して、わしら生徒に一冊ずつ、配ってくれてな」

「それまで、お店に行っても、メニューも読まれへんから、いつつも同じものしか頼まれへんかったんよ」

切なさの滲む声で言って、落子は手を伸ばすと、その教材を愛おしそうに撫でた。

「これのお陰で、外食が怖いこと無うなつてねえ。誰の助けも借りんと、ひとりでお店入って、注文して、食べて帰れた。どれだけ勇気をもらえたか、助かったか、知れへんの」

教員の指導要領に、こんなものを作りなさい、という指示があるとも思えない。

おそらく、その先生は「メニューが読めない」「決まったものしか頼めない」という生徒たちの日常の嘆きに耳を傾け、知恵を絞って、これを作ったのだらう。どれほどの労力と愛が籠っていることか。

ハヤシライスひとつ！

サラダツきのセットで！

脳裡に、誇らしげに注文する生徒たちの姿が思い浮かぶ。

メニューを眺めるさやかの眼から、不意に涙が溢れた。いけない、と焦って、さやかは乱暴に臉を拭う。

さやかちゃん、と遠見がさやかを呼んだ。

「夜間中学にも、色んな先生が居てはる。吉村先生みたいななんも、それに、これを作ってくれはった先生みたいななんも」
せやさかい、悪い例だけ見て、がっかりしたり悲しんだりしたらアカンで、と遠見は温かに話を終えた。

遠見の言葉に、落子が無言のまま、深々と頷いている。

- * 1 落子……………河堀夜間中学の生徒。中国残留孤児^{こじ}だった。
- * 2 補食……………夜間中学で提供される食事。給食。
- * 3 スアン……………河堀夜間中学の生徒。結婚^{けっこん}してベトナムから日本に来たばかり。
- * 4 遠見……………河堀夜間中学の生徒。初老の男性。宮古島出身。戦災孤児だった。
- * 5 健児……………河堀夜間中学の生徒。さやかより三つ年上。料理店に住み込んで修行中。

問一 A・B に入る漢字一字を次からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア 針^{はり} イ 鉄^{てつ} ウ 鈴^{すず} エ 鍵^{かぎ} オ 釘^{くぎ} カ 銭^{ぜに} キ 鉢^{はち} ク 銃^{じゅう}

問二 「Cを受けた」で「今までにない経験をした」「試練を与えられた」という意味になるように、Cに当てはまる言葉
葉を漢字二字で答えなさい。

問三 ――線部1「河堀夜間中学校に入学して、初めて覚える怒り」とありますが、さやかはなぜ怒りを覚えているのですか。最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 生徒に教える教材を真剣に作らないような教師を採用して授業を任せている河堀夜間中学校に失望し、夜間中学校に対しての不信感が強くなったから。

イ 余ったプリントを急いで足りないクラスに持っていくたのに、目指すクラスでは教師の合図でばかにされたように笑われて、高齢の生徒に見下されたから。

ウ 生徒に親しみを持ってもらうための例文だとしても、面白がっているのは教師だけで、仕方なしに笑っている生徒たちが困惑しているのに同情したから。

エ プリントを届けに行ったせいで、下品な言葉を使った授業を見る羽目になり、それを面白いと思って笑っている生徒たちの姿にショックを受けたから。

オ 文字や言葉を学ぼうと必死な生徒たちに対してふざけた例文を用い、真剣さが感じられない教師を見て、生徒たちを軽んじているように思えたから。

問四 ―線部2「さやかには、どうしても言えなかった」とありますが、言えなかった理由として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 生徒想いで一生懸命な鈴木先生だからこそ、同じ河堀夜間中学校の教師がいいかげんな仕事をしていることを聞けば、心を痛めるかもしれないと思ったから。

イ 生徒想いで優しいと思っていた鈴木先生も、もしかしたらさやかの知らない嫌な一面があるかもしれない、むやみに自分の心の内を明かすのは危険だと思ったから。

ウ 今まで現実を知らずに、生徒想いで一生懸命な先生たちばかりだと信じ切っていた自分が恥ずかしく、個人的な怒りを他人にぶつけてはいけないと思ったから。

エ 一年四組で見た授業の内容があまりにも下品で、教師に対する理想が高かったさやかには衝撃的な内容だったため、その内容を人に説明するのも嫌だったから。

オ まもなく授業が始まるのに、入学して初めて覚えた怒りについて、鈴木先生に話すには様々な感情が複雑に絡んでいてうまく説明できないと思ったから。

問五 ―線部3「友の後ろ姿を目で追って、さやかは小さく息を吐いた」とありますが、この行動からさやかがこれまでどのようなことを考えていたかが分かる連続した二文を本文中から探し、初めの五字をぬき出しなさい。

問六 — 線部4「貪欲で強かなんよ」とありますが、何を「貪欲で強か」と言っているのですか。最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア どこの世界にもいるろくでなしよりも、絶対に成功して見返してやるという固い決意。
イ やる気のない先生の授業は時間の無駄だと決めつけ、追い越してやろうとする意気込み。
ウ ろくでなしに会っても、自分を成長させる材料だと考えて前向きに学ぼうとする意志。
エ やる気のない先生がいたら抗議して、授業を改善してもらうため交渉を続ける粘り強さ。
オ ろくでなしに対して怒ったり失望したりせず、厳しい現実を受け入れようとする覚悟。

問七 — 線部5「愛おしそうに撫でた」とありますが、落子たちにとってこの教材はどのようなものだと考えられますか。最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 外食するときにこの教材を見せて注文すると、好きなものを自由に食べられるという便利で役立つもの。
イ 外食では決まったものしか頼めなかった生徒たちのために、先生が作った即席レストランの料理の思い出。
ウ 外食でメニューが読めず、人の助けなしでは注文できないという切ない悩みを克服する助けになったもの。
エ 本物のレストランでメニューの代わりにできる、国語の先生が苦勞して作ってプレゼントしてくれた宝物。
オ 本物のレストランのメニューをコピーして製本して配ってくれた、外食で注文する練習をするための本。

問八 — 線部6「不意に涙が溢れた」とありますが、涙が溢れたのはなぜだと考えられますか。四十字以上六十字以内で答えなさい。

問九

——線部7「悪い例だけ見て、がっかりしたり悲しんだりしたらアカンで」とありますが、このとき遠見はさやかにどんなことを伝えようとしているのですか。最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 一生懸命に勉強したいという気持ちは大事だが、世の中まじめな人ばかりではないから、現実をしつかり受け止め、理想ばかりを追いかけるべきではないということ。

イ 自分の希望や要求に合わないことがあっても、それがすべてではないから傷ついたりせずに、学び続けようという気持ちを強く持って乗り越えてほしいということ。

ウ たとえ生徒のためにならない授業があっても、夜間中学校のほとんどの先生は生徒想いで教えることに一生懸命なのだから、良い部分だけを見た方がよいということ。

エ 何か一つ悪い例を見ただけで、他の良い部分を忘れて怒りや悲しみに心を支配され、すぐに投げやりな態度になるのはさやかなの欠点なので直してほしいということ。

オ 不真面目な先生がいて学ぶのに悪い環境だったとしても、夜間中学校の生徒たちは貪欲で強かだから、さやかが涙を流すほど心配しなくても大丈夫だということ。

令和八年度

栄東中学校入学試験問題

〔国語〕

I 入試（1月10日）



26A110

ここにシールをはってください

受験番号

整理番号

氏名

解答用紙

（50分）

一	
4	1
5	2
6	3
7	4
8	5
9	6
10	7
11	8
12	9
13	10
14	11
15	12
16	13
17	14
18	15
19	16
20	17
21	18
22	19
23	20
24	21
25	22
26	23
27	24
28	25
29	26
30	27
31	28
32	29
33	30
34	31
35	32
36	33
37	34
38	35
39	36
40	37
41	38
42	39
43	40
44	41
45	42
46	43
47	44
48	45
49	46
50	47
51	48
52	49
53	50
54	51
55	52
56	53
57	54
58	55
59	56
60	57
61	58
62	59
63	60
64	61
65	62
66	63
67	64
68	65
69	66
70	67
71	68
72	69
73	70
74	71
75	72
76	73
77	74
78	75
79	76
80	77
81	78
82	79
83	80
84	81
85	82
86	83
87	84
88	85
89	86
90	87
91	88
92	89
93	90
94	91
95	92
96	93
97	94
98	95
99	96
100	97
101	98
102	99
103	100
104	101
105	102
106	103
107	104
108	105
109	106
110	107
111	108
112	109
113	110
114	111
115	112
116	113
117	114
118	115
119	116
120	117
121	118
122	119
123	120
124	121
125	122
126	123
127	124
128	125
129	126
130	127
131	128
132	129
133	130
134	131
135	132
136	133
137	134
138	135
139	136
140	137
141	138
142	139
143	140
144	141
145	142
146	143
147	144
148	145
149	146
150	147
151	148
152	149
153	150
154	151
155	152
156	153
157	154
158	155
159	156
160	157
161	158
162	159
163	160
164	161
165	162
166	163
167	164
168	165
169	166
170	167
171	168
172	169
173	170
174	171
175	172
176	173
177	174
178	175
179	176
180	177
181	178
182	179
183	180
184	181
185	182
186	183
187	184
188	185
189	186
190	187
191	188
192	189
193	190
194	191
195	192
196	193
197	194
198	195
199	196
200	197
201	198
202	199
203	200
204	201
205	202
206	203
207	204
208	205
209	206
210	207
211	208
212	209
213	210
214	211
215	212
216	213
217	214
218	215
219	216
220	217
221	218
222	219
223	220
224	221
225	222
226	223
227	224
228	225
229	226
230	227
231	228
232	229
233	230
234	231
235	232
236	233
237	234
238	235
239	236
240	237
241	238
242	239
243	240
244	241
245	242
246	243
247	244
248	245
249	246
250	247
251	248
252	249
253	250
254	251
255	252
256	253
257	254
258	255
259	256
260	257
261	258
262	259
263	260
264	261
265	262
266	263
267	264
268	265
269	266
270	267
271	268
272	269
273	270
274	271
275	272
276	273
277	274
278	275
279	276
280	277
281	278
282	279
283	280
284	281
285	282
286	283
287	284
288	285
289	286
290	287
291	288
292	289
293	290
294	291
295	292
296	293
297	294
298	295
299	296
300	297
301	298
302	299
303	300
304	301
305	302
306	303
307	304
308	305
309	306
310	307
311	308
312	309
313	310
314	311